

2017年4月12日(木)

2016年度フィンドレー大学春季研修 滞在報告書

3年H組

21461091 寺田稜

2017年3月13日から4月2日までの約3週間、春季休暇を利用してアメリカのオハイオ州にあるフィンドレー大学に滞在した。滞在期間中、獣医学準備コース（Pre-veterinary、以下プリベットと表記）の学生達の授業に参加した。どんなことをしたかの詳細は他にを行ったメンバーの誰かが恐らく記述していると思うので、私はアメリカと日本の似ているところ、異なっているところ、利点と欠点についてと今回の留学を通してのプログラムについて気付いた事をまとめていきたいと思う。

■フィンドレー大学の授業体制について

ひとつ目に、「ウエスタンバーンでの作業について」。フィンドレー大学では乗馬方法「ウエスタン」「イングリッシュ」にそれぞれ適した牧場を持っており、授業の一環として馬の世話から乗馬までを行うプログラムがある。私たちはその馬の世話を参加させてもらった。一人につき一頭から二頭ずつ担当の馬を与えられ、ブラッシングや体調管理、訓練を行う。この時与えられる馬はフィンドレー大学の所有の馬ではなくあらゆる牧場から訓練して欲しいと預けられているものであり、いずれまた牧場に返却することが決まっている。朝七時から生徒達は馬の餌やり、水やり、馬房の掃除、毛並のケアと体調の悪い馬には投薬を行う。やり方と薬量は確認し丁寧に教えて貰えるが、資格を持った医師が毎日その都度チェックしているわけでは無いため、注射での投薬などは生徒達が自分で行う事になる。日本ではこうした実践授業が殆ど無いため、動作を間違えたらどうしようという気持ちで不安いっぱいだったが、慣れているのか思っていたよりも皆もっと気楽に捉えている事が分かった（どちらかというとなりが気にし過ぎていただけなのかもしれない）。こうして一頭一頭を一年を掛けて世話する事で馬も担当の生徒に懐くし、生徒達も責任感や愛着が湧くのだろうと実感した。

また、ハース先生の授業も、大動物の歯科という分野があるとは知らなかったため非常に興味深かった。器材も様々なものが揃っており、保定台や別件で使った直腸検査用の手袋なども日本の物よりも近代化して便利であるように思った。

二つ目、カーンズ先生の授業アニマルサイエンスでは前半後半それぞれ一時間ずつの講義授業となる。とはいえ日本とスタイルは全く違い、十分ほど牧場の隅に作られた教室で座学で説明をした後、残りの二十分は牧場に移動して実践での取り組みだった。因みに先生の到着がいつも遅い為三十分くらい過ぎないと授業が始まらないというのが日本ではなかなか無いことなので新鮮だった。驚いたのは、いつも三十分押しでスタートする事は理解しつつも全員定刻には教室で授業が始まるのを待っている事である。一人や二人遅れて来そうなものだが、生徒の前向きな姿勢は日本も見習うべきだと思った。ひとクラスの人数は大体二十人前後であり、治療動作を全員が見えやすいようになっていた。

驚いたのは豚の去勢手術なども生徒が参加できることである。大体一人一匹くらいずつ

子豚を受け持つ為、やり方もしっかり覚える事ができ、またやる気にも繋がると思った。カーズ先生の授業を受講している三、四年生の生徒がアシスタントしており、私達と同じ年もしくは年下の学生の方がずっと現場慣れしている事に感動し、また私達が遅れていることに焦りを感じた。教えて貰えば出来ないことではないが、ただ一点気になる点として衛生面が挙げられる。最初の消毒もなく通常の服で豚を支え、場合によっては手を洗っていないままの素手で睾丸を押し出すといった場面も見られ、衝撃だった。これから出荷される家畜なのでペットほど丁寧では無いにしろ、これでは腹膜炎になってしまうのでは無いかと心配である。

今回の留学の目玉である「フライデーナイトピザパーティー」とは、金曜日の夜、牧場の教室に集まって夕食にピザを食べた後、カーズ先生の指揮のもと、去勢や採血などの実習に入るプログラムである。このパーティーは毎週行われており、一年生から院生までの希望者が集う実習になっている。衛生面に関してはこちらも同様少し心配なところはあるが、去勢の対象がペットの猫などの場合、手の消毒や術部の消毒はしっかり行われている様だった。一年生からこうして手術に参加させて貰えるのは勉強のモチベーションと技術の両方を上げるのに良く、日本でももっと気軽に実習に申し込める様な雰囲気を作って欲しいと思った。手術に参加した際に、私の担当した猫は偶然胎盤や子宮のない奇形だったため珍しいケースを見る事ができて貴重な経験になった。二十二時半ごろ猫の去勢が終わった後、今度は馬房に移動して百頭あまりの馬の採血や投薬を行なった。話では一番遅い日で二時くらいで大抵もう少し早く終わると聞いていたが、大体どの日も二時くらいだった。ただ、作業が非常に楽しいため時間が過ぎるのは早かった。

全体的に見ると、アメリカの授業は基本的に生徒の「参加型」であり、日本の「享受型」で無いところが最も生徒を伸ばす方法であると思った。

■アメリカの施設について

私達が回った施設は大型の動物病院、コロンバス動物園、そして保健所に似た施設などである。動物病院に関してはホームステイの際に他の小さな私営の病院も見学したのでそこも比較しながら、特に日本とは異なると感じた動物病院・動物園の事項についてまとめていきたい。

日本とアメリカでの格段に違う点は施設内の広さの他に、匂いについてである。日本の動物病院は恐らく犬の涎の匂いがするのに対し、アメリカの動物病院はまるでそういった匂いがしないことが印象的だった。ただ無臭という訳では無く、少々強めの芳香剤の匂いを感じたため、人間にとっては過ごしやすい空間であるが動物にとって過ごしやすいかどうかは疑問である。また、日本よりもよいと思った点としてやはり土地の広さを生かした大きな施設と、大きさに余裕のある動物用のケージ、日本では見たこともない器材や、大

型病院にしかなさそうな大きな器具が個人経営の動物病院にもあること、そして動物病院の開院時間の早さである。日本の動物病院というと大抵十時くらいに始まるのを想像するが、アメリカは朝八時にスタートであり、夕方の同じ時間頃に閉まることを考えると非常に良心的であるなど思った。大型の動物病院にはリハビリ用のウォータープールも設置しており、日本とのリハビリ料金の比較をしたかったが聞きそびれてしまったことが心残りのため、また折りをみて質問してみたいと考えている。

欠点としては、私のホームステイ先の子が手伝っている動物病院で見学した際の動物の治療方法について、保定方法など檻に思い切り押し付けたり脱走した犬に怒りを激しくぶつけている姿が頻繁に見られ、気持ちは分からなくもないがあまりにも乱暴な扱いだったため、もし自分の預けている犬が病院の裏でこうした扱いを受けていたらと思うとあまり好ましい形では無いと思った。また、フィラリアなどの検査や注射を、監督者がいるとはいえまだ完全にその分野についての授業を受けている訳ではない学生に任せている面も見られ、不安は残ると思った。

動物園は日本よりもずっと良い環境に作られていた。動物一頭一頭に与えられる広大な敷地はやはり狭い日本では到底不可能な物であり、動物が暮らしやすそうに見えた。二重扉の工夫が施されたゾーンでは動物との距離が大変近く、日本の動物園にもいる動物でも日本の壁ごしとは全く違う感動が得られる。また、動物園全体の雰囲気もテーマパークとして統一されており、倉庫ひとつにおいてもお洒落な木の小屋になっていたりデザインの施された看板が掛かっていたりと、歩いている此方がわくわくしてくる要素が多かった点も良い点だと思った。

■人と動物のふれあいについて

今回の留学のもう一つの注目点としてあげられるのが、アメリカ人の動物への向き合い方と触れ合い方についてである。今回のプログラムに含まれているホースセラピーについて、以前名前だけは聞いたことはあったもののどういったものなのか気になっていた。概要としては身体や精神に障害のある人が乗馬を通して身体や心のリハビリを行うことが目的である。患者に対して馬を引く人と、万が一に備えて横で並歩する人が二人の計三人のスタッフが担当として付き添い、馬のブラッシングをし、馬に乗った状態で肩や腕を回したり、走ったり、また馬の身体の部位の名称を覚えたりする。スタッフは上手くいけば誉め、例えば名称を覚えていなくても小声でヒントを出したりという優しい空間を作ることが重要であるのだと感じた。驚いた点は、馬の部位の名称を日本語で言うならば「脚」「蹄」などの大まかな名前ではなく、「大腿筋」「球節」といった、獣医学部でなければなかなか覚えることも無いような細かい名称まで教えているところだった。

やはり馬の世話の授業と比べると殆どスタッフが大まかなことは済ませているが、ブラ

ッシングをすることや馬について細かく知ることによって彼らの自信に繋がるのだろうと思った。

アメリカについては聞きそびれてしまったが、調べてみたところヨーロッパなどでは健康保険適用になっている国もあるそうだ。残念ながら日本では健康保険は適用外であり、もっとホースセラピーが日本内で知られて行くことを願っている。

犬のしつけ教室に関しては、日本とさして大差がないように思った。立地条件は窓がなく閉鎖的であること、床が滑りやすいつるつるの床であったことなどから、どちらかと言うとジョーカーなどの日本の会社で行なっているしつけ教室の方が優れているように思った。また、今回初めて組まれた留学プログラムであるせいかもしれないが私達はしつけ教室に参加できるわけではなくただ座って見学するだけという形だったので、わざわざアメリカに行って時間を掛けて見学する程の価値は見出せず、非常に残念な点である。因みにこれは最終日に立ち寄った猫カフェに関しても同じ感想が言える。日本には十年以上前から猫カフェに似たものが存在しており、そこもアメリカと同じく猫を保護したり、来た客に引き渡しを行っているところもある。見て損ではないが、もし可能ならば来年しつけ関係のプログラムを組むならば、日本にはないプログラムであったり、留学生も参加できるプログラムか、もしくはアジリティドッグの見学の方が興味深く見るができると思う。

■全体の生活とプログラムについて

フィンドレーの日の出は遅く、八時を過ぎないと日が登らないため登校は夜中の暗さの中での出発だった。フィンドレーから牧場までは車で二十分ほど離れており、学校からは巡回のバンが出ている。午前中の授業を出た後は一度食堂に帰って昼食をとり、また牧場に戻るとというのが今回の一週間のルーティンである。

食事は学食がバイキング形式になっており、アメリカと言えばピザハンバーガーポテトといった肉類と炭水化物ばかりを想像してしまうが、サラダバーもあり、レストランなどでも前菜で大きな平皿一枚分に山盛り野菜が出て来るなど、日本にいる時よりもずっと野菜を摂ることが出来た。味は然程濃すぎる訳でも無く、日本人の舌に合いやすい食事が多かった。ただし分量は日本の三倍くらい出て来るため、どちらかと言うと食べきる方が困難である。「質より量」とは言うが、確かにアメリカでの生活で「これはちょっと高いのでは？」と食事に関して思うことは全くなかった。寧ろ大盛り過ぎて値段は嘘を吐かないといった形である。唯一欠点としてはサービス精神はあまり無いため、「うっかり一品足りない」や、「うっかりメニューを間違えた」といった事案が多いなと感じた。日本で育ってしまうとそういった点が少し気になるかもしれない。

次に服装と気候、宿泊とプログラムについて。気候は三月の北海道とさして変わらず、頻繁に雪が降ったり冷え込む日が多く、ライトダウンコートと厚めのウィンドブレーカーを重ねて着てもまだ寒い程だった。暖かいと聞いていたので薄手の服で来た人は恐らく相当寒かったと思う。お洒落は然程する必要が無く、大抵の人がジーパンとパーカーで歩いているため、服を選ばなくていい点が非常に暮らしやすいと思った。

また、私達が宿泊していたウェルカムハウスは一階を温かくしようとする二階の泊まる部屋が異常に暑くなってしまい、風通しも悪い部屋だったため半袖が必要だと思った。さらに、恐らく一人部屋（頑張っ二人が限界）に二段ベッドを二つ押し込んだ部屋だったため、部屋で歩いたり座ったりすることもままならず、一人が部屋の両際にあるベッドを跨いで立ち、その下を潜らないと通過できないといった場面も多く、そこは改善すべき点であると思う。改善点についてはもう何点か見受けられ、ウェルカムハウスに設置されたシャワーがひとつであり、既に住んでいる学生も含めて六人でひとつのシャワーを使うことになった。朝のウェスタンバーンに向かうバンが六時半出発であり、私達は毎日六時に起きる必要があった。だが、前日のプログラムを終えて食事を取って帰宅すると深夜十一時を過ぎている日も少なくなく、そこから一人ずつ風呂に入ると最後の人は就寝が二時を過ぎてしまい、私は割と睡眠が短くても平気な体質なので最後に風呂を入れることが多かったのだがそれでもあまりにも短い睡眠時間が三週間続いた事が祟って体調を崩し、最後の三日で寝込むことになってしまい非常に残念だった。是非次に行く留学生にはもう少し睡眠時間と生活リズムを考慮したプログラムを組んでほしい。

そして、次回の留学生には「洗濯・乾燥機のかげられるかさばらない服」を用意すること、そしてできれば数本で良いのでハンガー、部屋に張る紐、洗濯ネットを持ってくる事をお勧めしたい。動物を扱う授業であるため、糞尿に泥、埃、血や薬など上着が汚れる事は多々ある。この時、かさばる服だとその服だけで洗濯機を回さなければならず非常に不便であること、すぐ翌日も使いたいのに乾燥機の掛けられない服だと服が乾かず着られないことなどが理由にあげられる。ハンガーと紐に関しては、乾燥機で必ずしも服が乾くとは限らないため（先に住んでいる学生が乾燥機に服を入れっぱなしで使えないなどということも多々ある）、せめてどちらかだけでも持って行くべきである。また、洗濯ネットに関しては靴下などのばらばらになると困るものなどを入れておくと後で片方見つからないなどといった被害が防げると思う。

最後にホームステイについて。今回のホームステイは私にとって一番楽しいプログラムであったが故に、今回の経験を通してホームステイ先について、「どういうプログラムをホームステイでする予定か」「いつ頃どこで集合する予定か」については先に学校側で確認するよう強く希望する。非常に英会話の勉強になったが、今回ホームステイで私が行った事を後から一緒に行ったメンバーにそれぞれのホームステイについて問うたところ、どう

もプログラムに大きな差があったように感じたことを問題提起したい。また、前日自分だけ何時ごろどこに集合すればいいのか連絡が来なかったことや、参加した日曜礼拝が私が知っているカトリックやプロテスタントなどの礼拝とは宗教の雰囲気が大きく異なり非常に不安を感じたことなど、様々な点で不安が多く、つらい点も少なくなかった。

■総括

今回の留学プログラムは総合的に見て非常に勉強になったが、やはりホームステイの件と体調を崩してしまった件については残念であった。是非このレポートを次回の留学生のために役立てて欲しいと切に願っている。